１病第２号の７
平成２１年９月２９日

関係各位

京都府病害虫防除所長
（公　印　省　略）

病害虫発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病害虫発生予報第８号（１０月）

予報の概要

作物名	病害虫名	予想発生量 〈平年比（前年比）〉
黒大豆・アズキ	ハスモンヨトウ ハダニ類 吸実性カメムシ類（黒大豆）	並 やや多 並
チャ	チャノコカクモンハマキ チャノホソガ カンザワハダニ	発生量：山城　やや多（やや多） 丹波　並（並） 発生時期（幼虫ふ化期） 10月2半旬～10月4半旬（並） 10月1半旬～10月3半旬（やや早） 発生量：並（山城　やや少） （丹波　やや多） やや多（多）
野菜	べと病、黒斑病、白斑病（アブラナ科野菜） 菌核病（キャベツ） 黒腐病（キャベツ等）、黒斑細菌病（アブラナ科野菜） コナガ（アブラナ科野菜） ハスモンヨトウ（野菜全般） シロオビノメイガ（ホウレンソウ） ネギハモグリバエ ハモグリバエ類（果菜類等） タバコガ類（野菜全般） ハイマダラノメイガ（アブラナ科野菜）	やや多（やや多） やや多（やや多） やや多（やや多） 並（並） 並（並） 並（並） やや多（並） 並（やや少） やや多 やや少（やや少）

※平年とは過去１０年の平均である。

■■■■■■■■■■■ 目次 ■■■■■■■■■■■

予報の概要 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
予報　Ⅰ　近畿地方１か月予報 ・・・・・・・・・・・2
　　Ⅱ　用語の定義 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　　Ⅲ　予報本文の見方・・・・・・・・・・・・・・・・3
　　Ⅳ　予報本文 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
今後注意すべきその他の病害虫等・・・・・・・8

予　報

Ⅰ　近畿地方１か月予報
（９月２６日から１０月２５日までの天候見通し）

平成２１年９月２５日
大阪管区気象台発表

＜予想される向こう１か月の天候＞

向こう１か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は数日の周期でかわるでしょう。平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう１か月は、気温が高い確率５０％です。

週別の気温は、１週目は高い確率７０％、２週目は高い確率５０％です。

＜向こう１か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気　温	２０	３０	５０
降水量	３０	４０	３０
日照時間	３０	４０	３０

病害虫防除所では上記の天候の１か月予報の表現を**「向こう１か月の気温は高く、降水量及び日照時間は平年並と予想されている。」**としました。

Ⅱ　用語の定義

１　半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

２　発生量－－－病害虫の発生程度と広がりの両面を加味したものをいう。

３　発生及び被害等の程度－－－程度は甚、多、中、少、無の５段階に分ける。
それぞれの病害虫の基準については各作物の項参照。

４　平年値－－－原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

５　平年値との比較

１）時期

平年並	平年値を中心として前後２日以内
やや早い	平年値より３～５日早い
やや遅い	平年値より３～５日遅い
早い	平年値より６日以上早い
遅い	平年値より６日以上遅い

２）量（発生量、発生面積等）

平年並	平年値並の発生で10年間に４回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に２回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に２回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に１回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に１回程度しか発生しない量

Ⅲ　予報本文の見方

「予報本文」には発生量等を予想している病害虫を、「今後注意すべきその他の病害虫等」には発生量等の予想はしていませんが、注意すべき病害虫について記載しています。

（見方の例）

３　チャノコカクモンハマキ

予報内容　　発生量：山城　平年比少ない　（前年比少ない）
　　丹波　平年比やや多い（前年比やや多い）
　　発生時期：第３世代幼虫ふ化期８月第３～４半旬（平年並）

・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比として示しています。
・平年比の考え方は、「Ⅱ 用語の定義」の「４ 平年値との比較」を参照してください。
・（　）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較を示しています。
・必要に応じて地域別に示しています。

予報の根拠

（１）７月中旬現在、第２世代の発生量は山城で平年比少なく（－）、丹波でやや多い（＋）。
（２）第１世代成虫のフェロモントラップへの誘殺盛期は平年並であった。

・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップへの誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の根拠となった事項を示しています。
・文中の（－）、（＋）は、発生量の予想に影響を及ぼすと考えられるもので、（－）の場合は発生量が少なくなる要因、（＋）は発生量は多くなる要因を示します。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）通常、４回世代を繰り返し、第２世代成虫が７月下旬～８月上中旬に発生し産卵する。
（２）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除上の留意事項、要防除水準等を示しています。

Ⅳ　予報本文

黒大豆・アズキ

1　ハスモンヨトウ

予報内容　　発生量：平年並
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。
（２）９月第４半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並。
（３）１０月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）齢が進んだ幼虫は周囲に分散し、かつ、薬剤の効果が著しく低下するので、若齢幼虫期の防除が重要である

2　ハダニ類

予報内容　　発生量：平年比やや多い
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は平年並～やや多い（＋）。
（２）１０月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）晴天が続くと多発しやすいので注意する。

3　吸実性カメムシ類（黒大豆）

予報内容　　発生量：平年並
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は平年比やや少ない（－）。
（２）９月第４半旬現在、予察灯への誘殺数は平年並。
（３）１０月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）莢が黄変する時期まで吸汁を続け、ほ場周辺に雑草地など発生しやすい場所があると、被害を受けやすい。

チャ

1　チャノコカクモンハマキ

予報内容　発生量：山城　平年比やや多い（前年比やや多い）
　　丹波　平年並　　（前年並）
　　発生時期：第４世代幼虫ふ化期
　　山城　１０月第２～４半旬（平年並）
　　丹波　１０月第１～３半旬（平年比やや早い）
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（＋）、丹波で平年並。
（２）フェロモントラップへの誘殺盛期は宇治で平年並、綾部で平年比やや早い。
発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）通常、第４世代幼虫が、綴った葉の中で越冬して翌春の発生源となる。
（２）ふ化した幼虫は葉を綴って食害するようになるため、薬剤がかかりにくいので注意する。

２　チャノホソガ

予報内容　　発　生　量：平年並（山城　前年比やや少ない）
（丹波　前年比やや多い）

予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は平年並。

発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）特に自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し、越冬密度を下げるようにする。
（２）被害葉はチャノキイロアザミウマやカンザワハダニの発生源になるので注意する。

３　カンザワハダニ

予報内容　　発　生　量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は山城で平年比やや多く（＋）、丹波で平年並。
（２）１０月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。
（２）翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。１１月中に防除する。

野菜

１　べと病、黒斑病、白斑病（アブラナ科野菜）

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量はカブで平年比やや多い（＋）。
（２）１０月の気温は高く（－）、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）肥切れは発病を助長するので、肥培管理に注意する。
（２）結球開始期以降、気温が低く曇雨天が続くと発生しやすい。

２　菌核病（キャベツ）

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠
（１）春期の発生量は平年比多い（＋）。
（２）９月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。
（３）１０月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）適温は２０℃前後、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
（２）発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で２～３年間生き残る。

3　黒腐病（キャベツ等）・黒斑細菌病（アブラナ科野菜）

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は平年比やや多い（＋）。
（２）１０月の気温は高く、降水量は平年並と予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、発病を助長する。
（２）降雨日数と発生量との相関が高い。

4　コナガ（アブラナ科野菜）

予報内容　　発生量：平年並（前年並）
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は平年並。
（２）９月第４半旬現在、予察灯への誘殺数は平年並。
（３）９月第４半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
（２）被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

5　ハスモンヨトウ（野菜全般）

予報内容　　発生量：平年並（前年並）
予報の根拠
（１）９月第４半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は平年並。
（２）１０月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）齢が進むと薬剤の効力が低下するので、早期発見に努め、若齢期に防除する。

6　シロオビノメイガ（ホウレンソウ）

予報内容　　発生量：平年並（前年並）
予報の根拠
（１）９月第４半旬現在、予察灯への誘殺数は平年並。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
（２）早期発見に努め、若齢幼虫期の防除に留意する。

7　ネギハモグリバエ

予報内容　　発生量：平年比やや多い（前年並）
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は平年並。
（２）１０月の気温は高く（＋）、降水量は平年並と予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。

８　ハモグリバエ類（果菜類等）

予報内容　　発生量：平年並（前年比やや少ない）
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量はナスで平年並。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）シュンギク、コマツナ等軟弱野菜は、被覆資材を用いた物理的防除に努める。
（２）幼虫は葉の中に潜り込み食害するが、その期間は３日程度と非常に短いので、薬剤を散布する場合は、発生確認後、速やかに行い防除時期を逸しないようにする。

９　タバコガ類［オオタバコガ、タバコガ］（野菜全般）

予報内容　　発生量：平年比やや多い
予報の根拠
（１）９月第４半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、オオタバコガで平年並、タバコガで平年比やや多い（＋）。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）発生すると被害が大きいので、早期発見に努める。
（２）幼虫が食入しているトマト、ナス、トウガラシ等の果実は処分する。

１０　ハイマダラノメイガ［ダイコンシンクイムシ］（アブラナ科野菜）

予報内容　　発生量：平年比やや少ない（前年比やや少ない）
予報の根拠
（１）９月中旬現在、発生量は例年比やや少ない（－）。
発生生態及び防除上注意すべき事項
（１）生育初期に加害されると大きな被害になるので注意する。
（２）ほ場を見回り、生長点付近の発生に特に気をつける。
（３）は種直後から寒冷しゃ等で被覆を行い、産卵を防ぐ。

今後注意すべきその他の病害虫等

アズキ

1　子実害虫類（アズキノメイガ、マメノメイガ、サヤムシガ類など）

今年は、天候の影響で播種遅れやまき直しを行ったほ場も多く、生育が遅れ気味となっている。

子実害虫類は、被害を確認してからでは手遅れとなることが多いので十分注意する。

発生生態及び防除上注意すべき事項

（１）幼虫が茎や莢内に食入すると、防除効果が劣るので、幼虫ふ化時期～食入開始時期の防除が重要である。

（２）開花初めから１０日間隔で２～３回の防除が有効である。

チャ

1　ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年８月に国内で初めて、京都府においてチャへの寄生が確認され、分布が拡大している。平成21年９月中旬の調査では、府内各地で発生を確認し、多発園も認めた。

（１）成虫の発生

年に４回発生する。

（２）対策

農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。

（３）登録のある薬剤

・ハチハチ乳剤（1,000倍、摘採14日前まで／１回）
・ハチハチフロアブル（1,000倍、摘採14日前まで／１回）
・アプロード水和剤（1,000倍、摘採14日前まで／２回以内）
・アプロードエースフロアブル（1,000倍、摘採14日前まで／１回）
・ダニゲッターフロアブル（2,000倍、摘採７日前まで／１回）
・ランネート45DF（1,000倍、摘採21日前まで／２回以内）
・トモノールＳ（50倍、使用時期１０月～３月）
・ラビサンスプレー（75倍、使用時期１０月～３月）

野菜

1　トマト黄化葉巻病

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV：Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認されて以降、最近では、平成20年11月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を

絶つ」ことが重要である。

【施設栽培】

（１）黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。

（２）先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壌に埋める等、適正に処分する。

２　タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプＪｐＬ）、バイオタイプＢ（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプＱが確認されている。バイオタイプＱは平成17年に国内で確認された侵入害虫で、発生確認後各地で発見されるようになった。

府内の分布調査では、タバココナジラミ類は京都府全域に発生し、特に夏以降発生が増加することがわかった。

平成17年には山城地域でバイオタイプＱが府内で初めて確認され、平成20年10月には、府内全域で発生を認めた。

バイオタイプＱは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の３点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

・施設内にコナジラミを「入れない」。

（１）開口部の防虫ネット被覆。

（２）黄色粘着ロールの展張。

（３）近紫外線カットフィルムの使用。

・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。

（１）発生初期の防除の徹底。

（２）薬剤のローテーション防除の実施。

（３）天敵や微生物農薬の有効利用。

・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

（１）開口部の防虫ネット被覆。

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス　http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター　電話番号一覧		
・京都乙訓	農業改良普及センター	０７５－３１５－２９０６
・山　城　北	農業改良普及センター	０７７４－６２－８６８６
・山　城　南	農業改良普及センター	０７７４－７２－０２３７
・南　　丹	農業改良普及センター	０７７１－６２－０６６５
・中　丹　東	農業改良普及センター	０７７３－４２－２２５５
・中　丹　西	農業改良普及センター	０７７３－２２－４９０１
・丹　　後	農業改良普及センター	０７７２－６２－４３０８

農作物病害虫情報サービス
・テレホンサービス ０７７１－２３－６４４２ ・ホームページアドレス http://www.pref.kyoto.jp/byogai/

京都府病害虫防除所

〒621－0806京都府亀岡市余部町和久成９
TEL　0771-23-9512
FAX　0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－